

家畜の人工授精について

畜産試験場

家畜人工授精師養成講習会の開講が試験場だより9月号のニュースに掲載されています。今回、一般にはよく知られていない家畜人工授精師とはどのような技術者なのかを紹介したいと思います。

まず、家畜の人工授精とは、雄畜から採取した精液を人工的に雌畜の生殖器管内に注入して受胎を図る繁殖技術です。つまり、自然交配を行わずに子牛などが生まれるということです。この技術は1920年代に実用化されましたが、1950年代初頭に精子の凍結保存技術の確立によって特に牛で世界的に普及し、現在では日本のほとんどの牛が人工授精によって生まれています。戦後、人工授精を行うことのできる技術者（人工授精師）は神様にたとえられるほどの衝撃を持って生産現場に迎え入れられました。

家畜の人工授精のメリットとして、精液を希釈することで多数の雌牛に授精できるため、優秀な遺伝形質を有する牛を同時に多数確保できることにあります。つまり、乳牛なら牛乳の生産量が多い牛を、肉牛なら肉質の優れる牛を早期に増やすことができます。実際に、この技術により戦後の乳牛の乳生産能力は飛躍的に伸びました。また、地域の肉用牛のブランド化に貢献した有名な種雄牛は、生涯に4万頭もの子孫を残したともいわれています。

長野県では1951年（昭和26年）から牛の人工授精師講習会を毎年開催し、これまでに約2,600名が家畜人工授精師免許を取得し、畜産現場に送り出しています。



講習会における精液の注入実習

担当者	大久保 吉啓	電話番号	0263-52-1188
-----	--------	------	--------------

[試験場だより・知って納得情報へ](#)

[畜産試験場ホームページへ](#)